

永生への道

——ヘミングウェイの場合——

大庭 勝

一九二五年の短篇集『われらの時代に』のさいしょにおかれた「インディアン」ではヘミングウェイが生涯かわり続けることになる死の問題が扱われている。きわめて自伝的な色合を帯びた短篇集の中で、ニック・アダムズという少年としてはじめて登場する人物が、父や叔父とインディアンとの村へ、眠い目をこすりながら、夜明けの冷気のなか、湖を渡って連れて行かれる。医師である父は、自分の仕事を見学させようというていどの気持であったが、息子のニックにとっては衝撃的な事件——インディアン女の帝王切開と、彼女の夫の自殺——に遭遇することになる。ざっくりとえぐられた咽喉。どろりと溜まった鮮血。

あわてて息子を遠ざける父親。しかし息子はすでにしっかりと見てしまっていた。不十分な状況の下での手術の成功に氣をよくしていた医師の得意な気持は消しとんだ。まさかここまででは医師の予想しなかったことである。

息子の質問は産みの苦しみに続いて、「自殺」に向けられた。

「あの人はどうして自殺したの、パパ」

「さあ、わからないな。きつというんなことに耐えられなかつたんだろ、うよ」

たしかに男は難産の妻の苦しみ、麻酔なしの、やや手荒な切開手術のことを知っている。その上、男は足にけがを

して苦しんでもいた。

「男の人はよく自殺するの、パパ」

「いや、そんなに多くはないよ、ニック」

「じゃあ、女の人は」

「めったに自殺しないね」

「絶対にしないの」

「いや、そんなことはないさ。ときには自殺するよ」

ここでニックが目撃したのは、自然死でもなければ、殺人でもない。しかし人間が死ぬということがニックにはよくわからない。

「死ぬのつてむずかしいの」

「いや、わりあい簡単さ。その時によるけどね」

やはり死ぬということがよくわからないニックには、夜明けの湖の、いつもと同じ平穏な景色の中で、あきらかに、父に抱かれてぬい目をごすつていた夜明のときよりも、いささかはつきり物事が見えてるように思われる。そしてニックは「絶対に死んだりなんかかかしくないと思う」。

このときのニックの「確信」が、確信であるはずはない。それは、いわば、少年の幻想にしか過ぎない。

この短篇集や、これに続くいくつかの物語の主人公をニ

ック・アダムズとして、『ニック・アダムズ物語』を編集したフィリップ・ヤングのやり方ほど徹底しないとしても、かなり自伝的なこれらの作品をとおして、この朝のニック少年の「確信」がどのような変質をこうむるかを辿ってみることにしよう。『われらの時代に』だけでも、第六章の「ごく短い物語」の前におかれた短章の中で、ニックは脊椎を撃たれ、教会のところまで引きずられて来て、壁にもたれ、両足をぶざまに投げ出して坐っている。ヘミングウェイ自身の体験では、全身におびただしい砲弾の破片がくいこんでいたし、彼のすぐそばで兵士たちが死んでいた。ヘミングウェイのイタリヤ戦線でのこのような体験をもとにして一九二九年に『武器よさらば』が発表された。「絶対に死んだりなんかかかしくない」という確信は、この段階で、粉々にうち砕かれてしまった。

さきほどの第六章のばあいのように、『われらの時代に』に集められた十五の短篇(さいごの二章は他より少し長い作品の第一部と第二部を構成している)の前にはそれぞれ、大なり小なり戦争にかかわりのある短章が添えられており、物語集の冒頭には「スミルナの埠頭にて」という、作者がかつて記者としてギリシャ・トルコ戦争を取材したときの

軍馬の悲惨な情景を描いた文章が、あたかも作品集のはしがきのようにおかれ、それと対をなすように、物語集のさいごには、革命軍によって宮殿に幽閉されたギリシヤ国王の姿を描いた短章がおかれていて、「われらの時代に」は平和はないのだ、という通底音のような重苦しい響きがこの作品集全体をおおっていることがわかる。

こうして、ニツクの「死」は戦争と深くかわりをもつようになる。作者ヘミングウェイは自ら望んで十八歳の若さで戦場に行き、非日常的な世界での人間のありようをしかと見ずえるようになる。そしてその体験が『われらの時代に』の中の短章にあらわれると、ニツクののどかな少年時代は、まだ十代ながら暴虐な戦争によってずたずたに引き裂かれる。『武器よさらば』の中ではヘンリー中尉の負傷がそれに対応する。ここでは死はもっとじっくりと考察される。そして死ぬのはヘンリーではなくて彼の愛するキャサリンである。ヘンリーの子を宿した彼女は長い陣痛の末、死産、そしてそれに続く出血多量のため、愛するヘンリーを残して死ぬ。

キャサリンは、「単独講和」を結んでイタリヤ戦争を離脱したヘンリーと共に嵐の夜に小舟に乗り、命からがらス

イスに逃れ、雪の山で出産までの日々を幸福に暮らしていた。雨の中、山を下って町の病院にやって来る。キャサリンには、雨の中で死ぬ自分の姿が悪夢のようにとりついて離れない。ヘンリーが懸命にはげましても彼女の心配は少しも薄らぎはしない。そして果てしなく続くかと思われる長い陣痛。一方のヘンリーにとっても、それは不安と焦燥の長く重苦しい時間である。ヘンリーの心にも死の冷たい不気味な姿が暗いかげを落としかじめる。キャサリンがもし死んだら、いや、死にはしない、と何度も何度も堂々廻りをする不安。そうしているうちにキャサリンの状況はどんどん悪化する。ヘンリーの、死についての想いも執拗さを増して、死はますます確実なものに思われてくる。今回はキャサリンの番。死ぬのは人間のさだめ。そしてそれは知らない間に突然しかし確実にやって来る。やり方はともかく、人間は結局は一人残らず殺される。

ここでヘンリーは野営で焚き火の上に丸太を一本のせたときのことを思い出す。この丸太にはおびたらしい数の蟻がたかっていた。丸太が燃えだすと、蟻はさいしょは火のついた真中へ、そしてあと戻りして端の方へ走る。混雑の中で火の中へ落ちて死ぬのもあり、逃げだしても焼け、熱

くない端の方に群がっても、しまいには火の中に落ちて死ぬ。

これは、つまり、キャサリンの、そしてヘンリー自身の、そうして、結局、人間の逃れることのできぬ運命なのだ。

キャサリンは意識を失い、医師が出血多量を止めることが出来ないまま息を引きとる。看護婦の制止をふり切つて無理やり入った病室の電燈を消した中でヘンリーはキャサリンに対面したが、それは、「塑像に別れを告げるようなものだった」。ヘンリーの愛したキャサリンは、今はただの物にしかすぎなかった。

ニツクの幼い日の、不死の確信は、あえなく、しかも確実に崩れ去つた。幻想に過ぎなかつたのだ。しかも人間は生の終わりのとき、単なる物になり果てると思えられている。

物に還元されたと思えられている女性の例を短篇集『女のいない男たち』（一九二七）の「アルプスの牧歌」のばあいで見ることによよう。

ニツクと覚しき人物が、友人のジョンとのんびりスキーを楽しんだあと、谷間の村へおきて来ると、寺男と農夫が

墓地で穴を埋める作業をしている。「晴れた五月の朝に墓穴を埋めている風景は、どこか非現実的だった」。ホテルのバーで二人が飲んでみると、先ほどの寺男と農夫が入ってくる。飲みおえて寺男の分まで払うと、農夫はそそくさと出て行く。ホテルの主人は埋葬されたのは農夫の女房だといひ、「あいつは獣ですよ」といふ。女房は去年の十一月に亡くなった。山の上は冬の訪れが早い。道は雪で埋められ、死体を里へ運ぶことができない。女房の死体は凍つた。雪どけになつて運ばれてきた死体を迎えた司祭は女房の顔のおおいをとりけると、夫オルツに尋ねた、「おかみさんはひどく苦しんだかね」と。答えは否だった。しかし変形した顔の謎を知ろうとしてなおもオルツを追及して、夫が夜なべ仕事するとき、凍つて壁に立てかけられた屍体の開いた口にカンテラを下げて仕事をしたことがわかる。とんでもないことだと思つた司祭が、「お前は、おかみさんを愛していたのかね」と尋ねると、オルツは、「ちやんと愛してました」と答える。

ヘンリーが愛したキャサリンの死体は「塑像」のようであり、オルツの女房の死体は、カンテラを下げるのに都合のよい物にしかすぎなかつた。ヘンリーもオルツも女を愛

していたことは確かである。しかし二人の男たちにとつて、死体になった相手は、もはや、愛の対象ではない。それで「獣も同然」と、オルツは司祭にも、ホテルの主人にも非難されたのである。

戦場での暴虐の死、愛する者の死、この運命は、ヘミングウェイの登場人物の拠りどころを根こそぎ奪い去った。

しかし、「失われた世代」などと意味あり気な名で呼ばれる世代の中心人物と目されるヘミングウェイは、果たして虚無の淵に沈んでいたのだろうか。戦場での深傷は、肉体的な傷にとどまらず、内面に深く食い込む傷を残した。第一次大戦後のパリに新妻のハドリーと移り住んで海外特派員のささやかな収入で貧乏暮らしをした若き日のヘミングウェイは、傷を抱えこみながら、修道僧のようにストイックに文学修行に打ちこんでいたのではなかったか。死後に出版された回想記『移動祝祭日』は、そのあたりの事情をよく伝えている。もちろん晩年のヘミングウェイが若い時代を振りかえるという、遠くのもの眺めるときのおぼろげな部分はあるにしても、「葱と水で」空腹をしのぎ、ルクサンポール公園の鳩をつかまえて食うなどというような事実もここには語られている。では登場人物たちは、この

淵からどのようにして脱出していったのだろうか。

ヘミングウェイは終戦の翌年、一九一九年秋、友人と、幼い頃の夏の日々を過ごした辺りに釣りの旅に出かけた。

「インディアン村」や、ニツクの両親も登場する「医師とその妻」の舞台となった、ミシガン州北部の地方である。

『われらの時代に』の中のさいごに置かれた二部（十四章と十五章）から成る「二つの心臓の大河」は、戦争直後のニツクの二日間の旅を描いている。なじみの風景の中にもどって来たニツクの内面はすっかり破壊され、安定感を失っている。かつてのシニーの町は大火のため焼野原になっている。国破れて山河在り、という風景である。川にかかる橋のところまで辿りついたニツクの心は躍った。「川はそこにあつた」からだ。流れは昔に変わらず急で、丸太の橋桁にぶつかって渦巻いていた。何もかも変り果てたという、それまでの思いが大きくゆさぶられた。急流の中には昔に変わらず鱒の悠然たる姿があつたではないか。ニツクは長いあいだ鱒の姿に見入った。どれもこれもみごとな姿である。変らぬものがここには確かにあつた。この部分で語り手は鱒が「じっと」していると、数回言及している。久

しぶりに見つめる鱒が、ちらと動いたとき、ニツクの心は緊張した。そして「以前とすっかりおなじ気持を味わった」。彼は楽しくさえなっていた。「考える必要も、書く必要も、そのほかのどんな必要も、すべておいてきた」ことも楽しい理由の一つである。「書く」ことに言及するあたり、作家を目ざすヘミングウェイとニツクとは、たいへん似通っている。

焼け野原にすむ、腹まで黒いばつたはニツクに親近感をもたせ、「どこかへ飛んで行け」と空中にほうり投げける場面は、ニツク自らへの励ましのように思われる。松林の先の木陰に横たわったニツクは、背中にあたる大地の感触を楽しんだ。川、鱒、そしてこんどは大地がニツクの心に快く迫ってくる。自然に包まれた快感。

平らな地面を探してキャンプの支度を始める。やまもの木を根こそぎ引きぬき、そのあとの地面を平らにならし、三枚の毛布をひろげ、一枚は二つ折りにして地面にじかに敷き、残りの二枚をその上にひろげる。というぐあいに、ニツクの手順——かつて覚えた手順——は、いともやすやすとニツクの手先によみがえる。こうして作られたテントの中で、「何か神秘的な、くつろいだ気分」を味わう。

この中ではニツクの気分がかき乱されることはないのだ。傷ついているニツクはまだこの様な保護を必要としている。

次に豆入りの豚肉の缶詰とスパゲティの缶詰をあけてフライパンで料理する手順も細かくきまつている。さらに、丘の下の流れから汲み上げた氷のように冷たい水を沸かし、コーヒールをいれることにする。方法は二つある。そのことで、むかしホプキンスという友人と議論したことがある。今回は結局ホプキンス流に従い、コーヒールをいれることにかけては真剣だった友人に敬意を表することになる。他人にとつては恐らくどうでもいいに違いない、これらの定型通りの手順が、ニツクの心に少しづつ安定感を取り戻させる。徐々にはあるがその効果は確実なものになる。定型や定石の与える平安といってもよいであろう。とはいっても、この場合、ニツクはあくまでも回復途上にある人間だということは忘れてはなるまい。物思いは心を乱す。ほの暗い沼地での釣りは先へのばした方が無事である。

回復の時期の主人公をじっくりと書きこんだ作品が『日はまた昇る』（一九二六）である。ニツクに当る人物は第一次大戦後のパリに住むジェイク・バーンス。彼は戦傷の

ため、男性としての機能を喪失している。昼は耐えていても、夜になると泣けてしまうこともある。このストイックな青年も回復途上にあり、「二つの心臓の大河」で鱒釣りをしたニックとの共通点がいくつもある。鱒釣りに心慰められるのもその一つである。自然界の治癒力はジェイクの場合にも大いに効果を發揮する。スペインへの旅の途中、ブルゲートでの鱒釣りは、連れの愉快な男たちのせいもあってジェイクの心を大いに和ませる。しかしスペイン旅行の最大の収穫は闘牛である。

スペイン北部の町バンプローナで行われる祝祭の中の闘牛はジェイクを興奮させただけでなく、「どう生きるか」(十四章)という問題を解く重要な鍵を与える。この間にもジェイクは時折教会に出かけて祈りを捧げたり、告解をしたりすることは記憶しておくべきだろう。サンフェルミンの祝祭は宗教的な行事で、この朝、ジェイクも聖堂のミサに出かける。

闘牛に深い理解を示し、心から楽しむことを知っている宿の亭主モントーヤが、アメリカ人には珍しいアフィシオナード(闘牛の醍醐味を知る人)と認めたジェイク・パーンズは、モントーヤ推薦の若い有望な闘牛士ペドロ・ロメ

ロに会うことができる。ロメロの見せたのは「本物の」闘牛だった。次の日のロメロの闘牛もすばらしかった。

「無理は邪道です」といったのは井伏鱒二だが、ロメロが「ほんものの感動」(十五章)を与えるのは無理のない美しい技のせいであった。「昔ながらのやり方」をし、牛に対して最大限にわが身をさらしながら、「純粹な線」を保つ。受けをねらう他の闘牛士のように体をねじ曲げたりはしない。「純粹な線」はいつもまっすぐで、不自然さがまったく見られない。肌は滑らかで、すき透っている。手は繊細で手首はほっそりしている。顔形も美しく、浮気女のプレットをつよく惹きつける。そして、きわめて礼儀正しく、自信に満ちてもいる。ロメロの手をとったプレットが、「あなたは長生きしますよ」というと、ロメロは「ほかは決して死にません」という。牛は親友だから、牛に殺されることはない、というのだ。ペドロは、『老人と海』で、親友ともいえるべき大魚と戦うサンチャゴ老人をしのばせる。

プレットのことで逆上したロバート・コーンはジェイクを殴り倒す。コーンはプリンストン在学中にミドル級のタイトルを取った腕前である。気を失ったジェイクはプレッ

トの許婚者マイクに助けおこされる。コーンが泣きながら謝つても受け付けない。喧嘩には負けても根性では負けな
い。ジェイクの男らしさを垣間見させる場面である。

このあとコーンがロメロの部屋へ行つてみると、ブレットは美しい闘牛士といっしょにいた。ロメロはコーンに十五回くらいなぐり倒されたが、そのたびに立ちあがつていつて、またなぐられる。もうなぐるのはやめたというコーンを壁ぎわに押しつけ、力いっぱい顔をなぐりつけて、ロメロはこんどこそほんとうにへたばつてしまった。助け起こそうとするコーンに、手を触れたら殺してやると毒づいて、追い出してしまった。ロメロの根性たるやまことに見事なものである。

ところで、ロメロが戦う闘牛場は、戦場とは当然異なる。戦場には仕切りはない。どこからどこまでという区切りはない。戦場では、フェアプレーも、美しい線も真実の感動も、一切かかわりがない。一方、闘牛場はむしろ神殿に近い。ある種の神々しい雰囲気の中で、きちんと定まった手順が、見事なまでに美しく、儀式的に進行していく。あるいは能舞台にたとえてもよい。怒りも愛も——どんなに激しい情熱でも——能舞台では整然としかも美しく演じられ

る。また、あるいは大相撲の土俵になぞらえてもよい。力士も行司も、何ゆえにあのように美しく装うのか。闘牛士はなぜあのように美々しい扮装をするのか。そして闘牛士のあの髪は、力士の、今やまことに時代離れた結髪とみごとに対比されるものではないか。闘牛も大相撲も、スポーツとはいうものの、芸術的といつてもよい美しさの結晶ではないか。そしてその美しいスポーツは、当然ながら、ごく限られた「舞台」の範囲内でのみ行われるものである。現実には目の前で演じられながら、あくまで現実とは一線を画した、一種の虚構の世界でだけ成り立つ芸術であり儀式である。スポーツの栄光とははかないものであり、そのゲームが終われば花火のように消え失せる。しかし、バンプローナの町でジェイクの心をしっかりと捉えた闘牛とそして闘牛士——とりわけ、みごとな闘牛士ベドロ・ロメロ——の世界は、深く傷ついたところから、必死に、健気に立ち上がろうとする男に対して強い感銘を与えた。ジェイクは名実ともに、モントーヤのいう「アフィシオナード」になったのである。

ヘミングウェイの登場人物の中には、たとえば「兵士の故郷」の若い帰還兵クレブズのように、戦争体験によつて

宗教心を根底から崩されてしまった者もいるが、ジェイクは、クレブズとは、かなり違っている。そういえば、戦争と愛の物語『武器よさらば』のヘンリー中尉は、出撃のとき、愛するキャサリンが首にかけていた聖アントニーの像を贈られる。ひとり山にこもり、さまざまな誘惑と戦い、悪の力に抵抗したという聖者のストイシズムは虚無的に見えるヘンリーが秘めているストイシズムである。

『日はまた昇る』の中でジェイクは「ぼくはカトリックですよ」（九章）といったり、パンプローナに着いてすぐ、通りのはずれで、なかなかよい教会を見つけて入ってみると祈りを捧げる人がおり、香のかおりが漂っている。ここでジェイクはひざまづいて祈りはじめ（十章）が、あまり虫のいいねがいに我ながら呆れて、「なんてたちの悪いカトリック教徒なんだろうと思」ったりする。さらに、アメリカから来た友人ビル——ジェイクやその仲間たちを「国籍喪失者」だとののしる（十二章）男——と釣りに行き、「お前はほんとうにカトリックなのかい」と尋ねられ、「たてまえの上ではね」とあいまいな返事をしている。またパンプローナでサンフェルミンの聖堂の近くをブレットと散歩しているとき、闘牛を明日に控えたロメロのた

めに祈りたいという彼女について暗い内部へ入り、ベンチの前にひざまづく（十八章）。ブレットは「宗教的な雰囲気というのはまったく性に合わない」といい、さらに、ジェイクは信心深そうには見えないとブレットがいうと、「いや、かなり信心深い方だよ」と答え、ブレットにからかわれている。とにかく、いかに生きるべきかと真剣に考え、また、あとで自分が嫌になるのは不道德だ（十四章）などと感じたりもするジェイクに宗教的関心がまったく欠けているとはいえない。

パリへ帰ろうとするジェイクのもとに一通の電報が届く。若い闘牛士と駆け落ちをしたブレットからで、マドリッドのホテルへ迎えに来てほしい、困っている、という内容である。自らの寛大さを嘲りながらもジェイクはマドリッド行きに急行に乗る。ブレットは独りだった。髪をのばして「女らしく」してほしい、そして結婚しようという真剣に懇願するロメロを、しかし、ブレットは、それは彼のためにならないと判断し、無理に立ち去らせたのだという。もう三十四歳の女が、うぶな若者をだめにするような性悪女にはなりたくなかった、と告白する。性悪女にはなるまいと決意したブレットは、それがちよっと「いい気持」なの

だといひ、その「いい気持」になることが、神の代りのよ
うなものだ、という。プレットのこの発見は、かつての、
しっかりと支えてくれる宗教を失った世代にとっての、たし
かなよりどころとなつて行く。

壮年期の主人公を扱つたものに「フランシスマコーマー
の短い幸福な生涯」(一九三六)と、「キリマンジャロの
雪」(一九三六)とがある。マコーマーはアフリカへサフ
アリに出かけ、妻をはじめ大勢の見てゐる前で、傷ついた
ライオンに不意に襲われて逃げ出してしまい、臆病さをさ
らすというみじめな体験をし、妻にはプロのハンターと浮
気をされる。しかし翌日、恐れる間もなく獣を撃ち倒した
マコーマーには臆病のかけらも残つていなかった。その直
後、夫を助けようとして妻が水牛をねらつた銃弾は、マコ
ーマーの頸部に命中し、マコーマーの「幸福な」時間は呆
気なく消え去る。ヘミングウェイの主人公が、勇敢な男に
生まれ変わる瞬間があざやかに描かれている。昼間はともか
く、夜になると泣いてしまうこともある、禁欲の人ジェイ
ク・バーンズからの、大いなる飛躍である。

キリマンジャロの麓で、壊疽のため余命いくばくもない
ハリーは、作家である。三〇年代のヘミングウェイと対比

できるような、芸術家としての中だるみの時期を悩みつつ
死の床に横たわつてゐる。金や女や、その他、ハリーの才
能を浪費させる誘惑に負けて、いま死を目前にしたとき、
「ぜい肉を取る」ためにやつてきたアフリカで、さいごの
力を振りしぼつて、今までに書けなかつたものを書き残し
たいと切望している。

この作品の冒頭で、アフリカの最高峰キリマンジャロの
雪におおわれた峰の西側の、マサイ語で「神の館」と呼ば
れる頂の近くに、ひからびて凍りついた一頭の豹の死骸が
横たわつてゐる、と語られてゐる。いつたい豹が何を求め
てこんな高い所まで登つてきたのか、誰にもわからない。

一方、生と死のはざまの幻想の中でハリーは、朝、小型機
に乗つて飛びたち、平原や動物たちをはるか下方に見つめ
ながら前方の、視野いっぱいキリマンジャロの峰の四角
な頂が朝の陽光の中で純白に輝いてゐるのを見たとき、た
しかに自分の目ざす所がその峰、つまり豹のいるすぐそば
であることがわかる。ところで死期の迫つたハリーをしば
しば不快にさせるのはハイエナである。夜な夜なハリーの
ベッドの近くを横切り、鳴き声を立てる。傍の女は「いや
らしい動物」と表現している。この不快な動物は、清らか

な雪の中に横たわる豹と鮮やかに対比される。『老人と海』の鮫とまかじきの対比によく似ている。いわば高貴な動物としての豹の姿がくつきりと浮かび上がる。

ハリーの幻想の終わるのと同時に、死を告げるようにハイエナの「泣くような声」がきこえる。

五つの回想を心の中で綴ったハリーは、今や高く美しい雪の峰を目ざして飛翔するかのようなのである。「塑像のよう」な存在でもなく、愛情を注いでくれた夫の目に何の意味をも持たない単なる物としての存在のようにならず、ハリーは清らかな雪の中で凍って永遠に変質することのない存在を目ざしている。

ヘミングウェイの生涯のさいごを飾ることになる『老人と海』（一九五二）の主人公は、メキシコ湾で独り漁をするサンチャゴという老人である。八十四日も続いた不漁にもめげず、継ぎはぎだらけの帆をはったおんぼろ船で、やせこけた体にむち打つようにして出漁する。なにもかも古いで、眼だけは海の青と同じ色をとたえ、不屈の生気がみなぎっていた。いたまし気に見守る浜の人々の中で、マノーリン少年だけは老人を信じ、敬愛している。少年はかつて老人に、二人で八十七日もの不漁のあと、三週間つづ

けて大魚をいくつも釣り上げたじゃないかと力づける。老人は少年を「漁師仲間」と呼び、少年は老人からいろいろ教えられたし、今後も多くのことを教わりたいと思っている。二人は信頼で結ばれた師と弟子なのである。

今日サンチャゴは、うんと遠出をするつもりだと語る。たしかに昔にくらべれば体力はおちている。しかし彼は少年の頃にアフリカで見たライオンの姿や、大男の黒人と一晩中腕相撲をして、この波止場いちばんの力自慢をついに負かしたことを思いだす。そしてとりわけ、いつも心優しく力づけてくれる少年にはげまされて老人は出漁し、今回も奮闘することになる。海は老人にとって女性であるが、鱒が悠然としている川が急流であるように、油断のない危険な存在でもある。この海を舞台にして老人は大魚と戦う。

この日、サンチャゴは潮にのってぐんぐん沖へ向かう。途中で出会ういくつかの魚たちには、親しみを感じるが、同時に軽侮の念ももつ。ハリーにとってハイエナと豹の対比があったように、これらの魚は、老人のねらう大魚とは格が違う。はるか沖合で、深い海底にひそまかじきは、よほどの大物にちがいないのだ。その手ごたえは、「いい気

持」だ。それは、十九歳のニツクが鱒釣りのとき自然の中で感じたのと同質の気分である。ただ老人の方がずっと力強く、大胆ではあるが。

手ごわい大魚との持久戦になると、老人は思わず「あの少年がいたらなあ」とマノーリンのことを思い出す。何度も思い出す。そして、きびしい戦いを、じっと耐えぬく。

ジェイク・バーンズが一所懸命、しなやかに耐えぬいたように老人はひたすら耐える。相手は今まで出あったことのないほどずばらしい、強い、賢い魚である。相手にとつて不足はない。世界中の人間から遠ざかって、空腹をわずかな魚肉でまぎらしながら、そして、幾度も「あの少年がいたらなあ」と心の中で叫びながら、大魚に対しては立派に戦うことを期待し、自らも大魚との大勝負を戦い抜こうとする。あまり信心深くはないと思っている老人も、天にまします父と聖母マリアへの祈りを十回ずつ捧げてもいいと思ったり、見事つかまえたならコーブレの聖処女へのお詣りを誓ってもいいとも思う。こうして老人は、この美しい、落ちついた、そして気高い大魚をようよう仕留める。ゆうに一五〇ポンドは超えようという代物である。しかし間もなく軽蔑すべき鮫の執拗な攻撃がはじまる。老人は「人

間は負けるようには造られていない」と確信して鮫と必死に抗争する。ときには「掌を板に釘づけにされた」ときのような叫びをあげて、先端にナイフをつけたオールで攻撃しつづける。まかじきの肉はどんどん食いちぎられてゆく。ナイフを失いオールを失い、棍棒を手に死闘をつづける。その棍棒も奪われて、鮫は今や大魚の頭にまで食いついてきた。そうしてもう食うところは少しも残ってはいなかったが、鮫はなおも骨にも食いついた。

老人が三日前に出かけた小さな港に帰りついたとき、大魚は、頭と白い背骨と大きな尾だけの残骸になり果てていた。帆を巻いたマストをかついで坂道を登る老人の姿は、ゴルゴタの丘へ登っていった人の姿を連想させる。

翌朝少年は老人を見てわっと泣く。見るかげもなくなった大魚の、そこだけは立派な頭をもらうことにする。老人の成しとげたことのたしかなあかしとなるものだ。少年がいなくて寂しかったと老人はいい、少年はまだまだ教えてもらうことがいっぱいあるという。師と弟子の絆は固く結ばれている。

浜におかれた大魚の長い背骨は潮に流されかかっていた。そのみごとな尻尾を見た観光団の女がそれを鮫の尻尾

と勘違いする。『日はまた昇る』のロバート・コーンがついにジェイクを理解できなかったように、行きずりの他所者にとつては老人の仕事も精神もついに無縁のものである。ペドロ・ロメロの闘牛のように、達成したという事実が重要なのであり、キリマンジャロの雪の峰を目ざしたハリーのように、老人は将来へ続く世界を、はるか沖合で——それを舞台といつてもよい——現実から侵されることなく保つことができる。そして、その世界を、老人の精神——漁師魂——をしつかり受けとめ、末永く伝えていくのはマノーリン少年である。サンチャゴという師父の教えに、忠実に、敬愛の念をこめて、永い生命を維持するのは、継承者としてのこの少年の任務である。『老人と海』の世界の、すべてをおおう宗教的雰囲気の中で、マノーリン少年は若い司祭のような輝きを帯び始める。